夕焼け通信
2020.2.3　1247号

編集 宮森健次

〒699-0823　島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りのくらし２　40

木幡智恵美

ぬか漬け（4）

耕作放棄地からいただいた種は、大根ではなく、カブの種だった。大根の間引き菜と一緒に浅漬けにし、刻んでタッパーに入れておくと、食事のたびに夫が自分のと義母のご飯の上に乗せて醤油を垂らして食べていた。

そのうち、大根よりカブの方が早く成長し、赤くて丸っこい根を土の上に出すようになったので、ぬか床に漬けてみた。真っ赤で丸いのもあれば、津田カブのような薄紫色の先の細くなったのもある。四日ほど経ってぬか床からあげ、刻んで食べると、あっさりした塩漬けとは違い、酸味のある独特の濃さのある味だった。

行くたびにカブが四～五個採れ、半分はぬか漬けに、半分は酢カブにする。酢カブは実歩の好物なのだ。寛大は酢カブを食べないので、大きくなってきた大根を砂糖、塩、酢を混ぜた液に置くだけの甘酢漬けにする。食卓に出すと、寛大の手は真っ先にこれに伸びる。

今年は、天候がちょうどいいのか、網の中のキャベツと白菜が順調に育っている。ここのところ白菜の出来が悪く、去年は早いうちに虫にやられ、散々だった。この分では数年ぶりにキムチ作りができるかもしれない。私にとって主食ともいえるキャベツも巻き始めている。その横に植えたブロッコリーは、網をかけずにいたせいか、アオムシにやられて葉がほとんどなくなっていたが、大分葉が出始めている。それでも、アオムシは行くたびに見つかるので、見つけ次第つぶしていく。でも、今回は寛大と実歩のために、五匹ばかりビニール袋にいれて持ち帰った。幼虫から蛹になり、羽化してチョウになるところを見せてやるためだ。保育所の友だちの影響か、虫に興味を持ち出した寛大は大喜びだった。

アオムシはすぐに蛹になったらしく、一週間後我が家に来た寛大と実歩は、「チョウチョになったよ」「窓から飛んでったよ」と報告してくれた。

がらがら橋日記

宮森健次

聞かざる

職場の忘年会で乾杯のご発声をと促されて、マイクの前に立った。あいさつなどしなくてすむならそれに越したことはないが、この年になると避けては通れない。

若い頃は、何のためにあいさつなどするのだろう、とはなから聞く気もなく、終わるまであれこれ別のことを考えるのが常だった。

聞かないことに関しては、キャリアが長い。そもそも校長先生の話をただ耐える小学生、というより耐えないですむ方法を模索する小学生だった。

中学生になると、わずかに聞きながら意識を別に飛ばすことに習熟した。窓の外の雲の流れだの、遠くの山並みを越えていく鳥の群れなどを眺めて空想にふける。

「はい、次は宮森君。」

教科書をさっぱり見ていないことに気づいた先生が突如指名する。先生が期待していたような間を一切空けずに音読する。意識のうちのわずかではあっても聞いてはいるのだ。どこを読めばいいかは、教科書に視線を戻した瞬間に分かる。

「君、聞いてなくてよく分かるね。」

先生は、教科書から目を離すことなく淡々とつぶやいて、次を指名する。授業後級友がからかう。

「また、言われちょったな。」

いつの頃からか、徐々にどんな話にも耳を傾けるようになっていったのだが、それなりに様々な立場を経験して、話す側の思いをいくらかは理解したということだろうか。聞くことに関しては、ぼくの成長は極めて遅かった。

「さて、今年もいろんなことがありました。楽しかったことも、しんどかったことも。」

中には、必ずぼくと同種の人間がいるに違いないが、みんな黙って聞いているように見える。笑ってほしいところは、笑ってくれる。

「でも、時が過ぎればたいていは笑い話です。」

私が言外に何の具体を含ませているか、職員には分かっているはずだ。

乾杯を終えて、席に戻る。若い職員たちが声をかけに来る。教頭先生の話はどうのこうの。へえ聞いてたのか。話しかけられながらふと考える。ほんとうか？時が過ぎれば苦しかったことは笑い話になるか？そんなものは、その程度のしんどさでしかなかったのでは？職員の話は続いている。そしてぼくはまた、聞いていない。

30代フリーター　やあ、ジイさん。衆院の代表質問で、国民民主党代表の玉木雄一郎が、選択的夫婦別姓の導入を求めたところ、それなら結婚しなくていい、という趣旨のヤジが自民党席から飛んだ、と報じられている（1月22日朝日新聞デジタル）。ヤジの主は右派議員として知られる杉田水脈と推定されている。

年金生活者　選択的夫婦別姓に反対する勢力ついてコラムニストの小田嶋隆が書いている。「不思議なのは、日本の伝統的な家族観を守るためには、伝統的家族観を守りたいと思っていない人たちに対しても伝統的家族観を守ることを強制しないといけないと思い込んでいる人たちがいることだ」（「人の結婚に介入したがる彼らは何者なんだ？」、1月24日日経ビジネス）

反対勢力は「日本の伝統的な家族観を守るためには」それを「強制しないといけないと思い込んでいる」というよりも、「伝統的家族観を守ることを強制」することこそそれを守ることなのだと思っていると理解したほうがいい。つまり、家族観は「選択」されるべきものではなく、国家によって強制されるべきものである、と彼らは考えていると推察される。

30代　そんなとんでもない考えを今の国民が受け入れるはずがない。

年金　戦中、戦前にさかのぼれば、それはあたりまえの考えだった。家族のあり方は選び取られるものではなく、強制されるものであるというのが大多数の国民の考えだった。

夫婦別姓に反対する勢力は、そうした戦前、戦中の家族観を取り戻したいと考えているということだ。これは家族を含めた私的な領域と国家という公的な領域を別次元のものと考えず、地続きとみなす近代以前の国家観にほかならない。

30代　夫婦同姓は明治になって初めて定められた制度で、江戸時代までは庶民には姓すらなく、姓をもつことができた武士も別姓の夫婦はいくらでもいた。それなのに、右派勢力が夫婦別姓に反対する根拠として同姓を日本の伝統と主張するのは矛盾しているという批判がある。

年金　彼らはそれをわかっていて、それでも矛盾とは感じていないはずだ。彼らにとって夫婦同姓以上に大事なのは、家族のあり方を国家が一律に強制することだからだ。より広く言えば、私的な領域が公的な領域に、市民社会が国家に従属する近代以前の状態こそ理想の国家のあり方と彼らは考えている。

それが夫婦同姓への固執に結びつくのは、同姓が個人の自立を阻む力を持っていると考えているからだろう。個人は国家に従属すべきだと考える彼らにとって個人の自立などもってのほかというのが本音のはずだ。

30代　明治政府が夫婦同姓を定めたのはフランスの伝統を輸入したからで、日本の民法づくりにフランスの法学者ボアソナードがかかわったためと池田信夫が解説していた（1月24日アゴラ）

年金　当時の政府が同姓を制度として選んだ理由はそれだけでなく、おそらく別の思惑があったと考えられる。一種の地方分権だった幕藩体制のもとでは、公権力が庶民の間近に存在していた。庶民の生活にいつでもどこでも介入でき、個人の自立を阻むのに好都合なポジションにあった。

明治維新によって中央集権国家が成立すると、庶民のすぐそばでその生活を縛ることのできる地方権力は消滅した。夫婦同姓はそれに代わる縛りとして導入されたと推定される。夫婦別姓を求める理由のひとつに個人の尊重があげられているように、同姓の強制は個人の自立を阻む力となる。個人の自立を認めないこと、私的な領域を公的な領域に従わせることは日本（ばかりではないが）古来の伝統であり、それを守ることこそ、夫婦別姓に反対する右派勢力の望むところにほかならない。

安倍晋三が去年の臨時国会で「みんなちがって、みんないい」と金子みすゞの詩まで引用して「多様性」を強調しながら、多様性の拡張である選択的夫婦別姓の導入を渋っているのは、そうした右派勢力をコアな支持層に持つからだ。

30代　なぜ彼らはそうした古い国家観に固執するのか。

年金　選択的消費が必需的消費を上回る消費の過剰化が国家から個人への権力の分散を駆動する世界史の流れに国家の存立の危機を感じ、分散した権力を回収しようと、個人を国家に従属させる前近代的な国に日本をあと戻りさせたがっていると推察することができる。

分散した権力の回収は自らの存立基盤に揺らぎを感じた国家が安倍政権に対して発した命令だ。その命令書は国家を個人の上位に置く右派勢力の復古的なイデオロギーの形を取って安倍晋三らに手渡された。政権がそれに拘束されるのは、逆らえば自らの中心的な支持層を失うからだ。

だが、そうした復古的なイデオロギーをそのまま現実の政治に適用すれば、分散した権力を手にして自立意識を強めている国民の離反を招き、分散をさらに助長する恐れがある。だから、安倍政権は国家第一のイデオロギーとは正反対の「多様性」を強調せざるを得ない。けれど、夫婦別姓は認めない。そうした中途半端さは政権の弱点であると同時に、内閣支持率の底堅さを支える要因のひとつとなっている。

ニュース日記　724

中村　礼治

安倍政権はなぜ選択的夫婦別姓の導入を渋るのか